2020 年度「ＢＢＣワールドニュース」番組審議委員会　議事録

【開催日時】　2021 年 2 月
【開催場所】　書面開催
【審議委員】（敬称略・五十音順）

1. マーシャ・クラッカワー（Marsha Krakower）　（聖心女子大学　英語文化コミュニケーション学科名誉教授）
2. 小池 政行（こいけ まさゆき）　（青山学院大学法科大学院客員教授・東京医療保健大学客員教授）
3. 柴原 早苗（しばはら さなえ）　（放送通訳者・大学講師）
4. 髙島 肇久（たかしま はつひさ）　（株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長）
5. 豊田 沖人（とよだ おきと）　（外国文学翻訳士・元 NHK 海外放送　英語アナウンサー）
6. 藤崎 一郎（ふじさき いちろう）　（一般社団法人日米協会　会長）
7. 藤村 厚夫（ふじむら あつお）　（スマートニュース株式会社　フェロー）＊委員長
8. 宮川 倫子（みやかわ みちこ）　（倫総合法律事務所　代表弁護士）

1.　BBC からのご報告

今年は新型コロナの影響で、国際ニュースに対する需要が大きく高まった 1 年となりました。BBC が 2020 年 7 月に発表した、1 週間あたりの BBC ワールドニュース(TV)の視聴者数は、世界 1.12 億人となり、特に米国では、新型コロナの第一波時に視聴者数が 50%増加しました。全世界の視聴可能世帯数は現在 4.5 億世帯となっています。また、主要な国際ニュースメディアに関する数々の調査でも、BBC は引き続き最も信頼されるニュースブランドに選ばれております。

新型コロナをめぐる報道では、どのニュース放送局より多くの国にジャーナリストを配置する BBC ならではのグローバルな報道を展開し、中国湖北省や東京、ロンドンの医療現場内部の様子を報道したほか、「新型コロナ：知っておくべきこと」「新型コロナウイルス 徹底解説」などの特別番組を毎週放送しました。

2.　審議内容

下記審議対象番組についてのご意見、ご感想

◆ドキュメンタリー

アワ・ワールド 世界は今：武漢 封鎖された町　Our World: Wuhan: Life Under Lockdown

2020 年 3 月 14 日放送（日本語字幕付き放送）

◆インタビュー

バラク・オバマ元米大統領インタビュー　Barack Obama Talks to David Olusoga

2020 年 11 月 21 日放送（二カ国語放送）

3.　議事概要

１）「アワ・ワールド 世界は今：武漢 封鎖された町」について

＜番組内容＞

毎週末放送している、世界が注目すべき問題について真実を追求する BBC のドキュメンタリーシリーズ。この放

送回では、2020 年 1 月、新型コロナウイルスのアウトブレイク（大流行）が発生した中国・武漢にいる映像制作者 2 人に独占取材。2 人は、都市封鎖がされていた際の同市内での暮らしぶりを、50 日以上にわたり記録した。

＜ご意見＞

・人口１０００万人を超す近代的な大都会の封鎖がどのように行われ、その結果、大都会はどのような姿になって、人々の暮らしがどう変わったかを克明に見せてくれたという点で出色の番組であったと思う。

・2020 年 3 月と大変に早い時期、世界に先駆けて、歴史的な実験である巨大都市の封鎖をめぐり、これだけの情報を報道できた点は賞賛に値する。

・タイムライン形式で紹介されているので、わかりやすかった。

・ボランティアの運転手を主人公として様々な人々を映し出す手法は、それぞれに同時進行する状況がよくわかり、とても良かったと思う。

・この番組を入手し、全世界に向けて放送したＢＢＣワールドに深甚なる敬意を表すると共に、番組を取材、制作した現地の二人を紹介するドキュメンタリー番組を是非もう一本制作して、見せてほしいと強く感じた。多分、二人の内の一人はウイルスに感染した看護婦とその夫を、もう一人は自家用車で人々を支援する男性を担当したのだと思うが、アウトブレイクから 1 年余りたった今、彼らが何を思い、どんな活動をしているかを伝えることはＷＨＯ調査団の現地調査に勝るとも劣らないだろうと思うからだ。

・とても小さな窓だが、中国人の日常を垣間見ることができた。

・misinformation が叫ばれる昨今、報道の役割を考えさせられた。今回のパンデミックは一種の戦争として例えられて、よく Battling the Pandemic のような見出しが多い。そして、その戦争が SNS での misinformation によって Infodemic となってしまった。一般的な報道は感染者や重傷者の数を伝えるのも役割であるが、他国の人々が中国を責めるように掻き立てるのではなく、その “Us vs. Them” の隔たりを埋めるような peacebuilding の働きも時にはしなくてはならないが、この番組はその兆しを見せてくれたと思う。

・映画などで用いられる on the road 形式での storytelling だったので、運び屋さんの目線で状況を見せていることで、親近感が湧いた。

・前大統領が “The Chinese Virus” と発言したことで、無意識でもメディアの framing がどうしても自分たちとは違う “Us vs. Them” (We vs. the Other) になりがちであるが、武漢の都市生活者の目線で展開して行くことで “the Other” の視点ではない framing でパンデミックをとらえていたと思う。

・医療従事者、その家族、また武漢の絆を維持しようとネットを駆使する若者の視点、立場は非常によく描かれており、映像、音声、翻訳は秀逸である。しかし、普通に武漢に暮らす住民、何ら伝手を持たない高齢者、中国の政治体制の下に不自由、孤独を感じる「普通の人々」の声、姿を BBC なら伝えて欲しかった。

・最初の 1 分間に 2 組の撮影者が紹介されるが、撮影者の違いがあまり明確にされていない。特に最初の撮影者の妻が看護師であることがもう少し早くはっきり説明されていたら、その後の展開がよりよく分かったのではないかと思った。またリンさんについても、何のブロガーか日本語では書いていないが、英語のナレーションでは旅行関係のブロガーであると言っているので、この辺りはもう少し詳しい方が良い。

・手に汗握るドキュメントだが、結果的に、中国は大胆に武漢を封鎖して、コロナの蔓延を防いだというサクセスストーリーにポイントが置かれてしまった。隠蔽したため、春節にかけて大量の人が中国全土に、それを通じ外国に行きコロナを広めてしまったことに触れるべきだった。その意味で WHO の無策に通じてしまう危険性があると思った。

・中国当局の対応の不透明性に関する批判的な言及が、本作品中に見られない点はいかにも惜しまれる。

・一般的な報道は、感染者や重傷者の数を伝えるのも役割であるが、他国の人々が中国を責めるように掻き立

てるのではなく、「Peacebuilding(平和構築)」の働きも時にはしなくてはならないが、この番組はその兆しを見せてくれたと思う。

２）「バラク・オバマ元米大統領インタビュー」について

＜番組内容＞

歴史学者デイビッド・オルソガがバラク・オバマ元大統領にインタビュー。待望の回顧録「A Promised Land(約束の地)」についてや、米国内の分断や陰謀論に対する懸念、また当時のホワイトハウスでの生活について語った。

＜ご意見＞

・オバマ元大統領の人気は米国の歴代大統領の中で一二を争うほど高いと聞くが、この番組を見ると「それももっともだ」と思うほどの人柄の素晴らしさと知性の豊かさが感じられた。インタビューをした歴史学者オルソガ氏の力量は勿論だがオバマ氏自身の力のなせる業としか言いようがない。

・全体に、自著 PR という要素、トランプ氏敗退にいささか溜飲を下げた感のある発言が気になるところだが、インタビュアーが述べる「アメリカの矛盾と可能性」の両面に言及があった点で評価ができる。全体にアメリカ内部の、まさに矛盾、課題をめぐってオバマ氏を評価する視点の強い作品となっているが、惜しむらくは、世界から見た「オバマ大統領」の評価にも言及があるべきだった。

・いかにもオーソドックスな BBC らしいインタビューだったと言える。恐らくアメリカのメディアには見せない、フランクな内容だと思える。

・他の国内メディアと異なっていると感じたのは、米国社会の分断や陰謀説に触れていても、トランプ前大統領について必要以上に触れなかったのが新鮮だった。

・このインタビューは人種問題に絞り、面白かったと思う。いい切り口だった。

・時折、収録場所の舞台裏ともいえるカメラやライトを意図的に画面に入れて、テレビインタビューであることを殊更に示そうとしていたことが新鮮であり、かつ微笑ましかった。

・インタビューなので限界はあるとは思うが、歴史を振り返っていたので、当時の映像がもう少し映し出されたほうが、語り手とともに振り返ることができたと思った。

・同時通訳は、男性陣２人を投入した方がよりクオリティが高いドキュメンタリーになったと思う。また、要職に就く方々に対して英語で you が使われていても、「あなた」という日本語は普通使わないと思われるので、「大統領は」「ご自身は」とするか、敬語だけで対処するなど、工夫の余地があると思う。

３）その他の番組、チャンネル全体について

＜ご意見＞

・番組審査の対象として選ぶなら、オバマ大統領インタビューよりも、駐英中国大使インタビューの方が良かったのではないか。勿論、オバマ・インタビューは素晴らしい内容でとても楽しめたが、ＢＢＣインタビュー番組の最大の特徴は、「嫌がるゲストをスタジオに呼んで、厳しい質問をヅケヅケ浴びせる」というものだと思う。

・英国駐在中国大使に対し、鋭く切り込むインタビュアーに感心した。大使は同じことの繰り返しで説得力がなかった。

・BBC が番組内で駐英中国大使を招き、新疆ウイグル自治区での中国による暴虐ぶりを敢然と問い詰めるなど、世界に影響をもたらすような報道姿勢を見せたことは、賞賛に値する。

・２０２０年は新型コロナのニュース一色となったといっても過言ではない。BBC は、様々な視点からの番組を工夫して報道されていたと思う。社会不安がまん延している時代は報道機関の真価が問われる。今後も、市民

が、世の中に起こっている現実を知り、様々な観点から専門的な知識を得て、正確な情報に基づき行動できるようにするための報道を期待する。
・２０２０年には、米大統領選や新型コロナウイルスに象徴されるように、真偽検証（ファクトチェック）がなされるべき情報が膨大となっている状況がある。ファクトチェック態勢や情報メディアリテラシーの社会的な養成について、BBC は報道分野で積極的に取り組んでいると評価すべきと考える。
・最近の土、日の放送はニュースの他、ストレートな報道以外の番組も多くなった。良いと思う。

４．委員長総括

2020 年度「BBC ワールドニュース」番組審議会は、BBC 側から提示を受けた 2 番組、1)「アワ・ワールド 世界は今：武漢 封鎖された町」および、2)「バラク・オバマ元米大統領インタビュー」について、8 名の審議委員（今回の審議委員長の藤村厚夫を含む）による真摯な感想および意見提示を受けました。
また、上記 2 作品以外にも、BBC のその他番組や報道全般をめぐる点についても、自由な意見提示を受けました。

1)「アワ・ワールド 世界は今：武漢 封鎖された町」について
まず、中国において新型コロナウイルスが急速に感染を広げ、歴史的な「都市封鎖」が行われた状況を、世界に先駆けて早期にかつリアルに伝える報道番組であったとする賞賛、評価の声が複数の委員から寄せられました。
一方で、中国という権威主義的な体制下での報道という不自由さもあってか、やや「サクセスストーリー」に傾いたのではとの指摘があったことは記憶しておきたいと思います。

2)「バラク・オバマ元米大統領インタビュー」については
オバマ氏という傑出した人物の魅力が伝わったこと、人種問題や分断など「アメリカの矛盾と可能性」に触れた点などで、高い評価が寄せられました。また、撮影や演出などにも工夫が見えたとする評価もありました。
一方で、同時通訳について、元大統領にふさわしい敬語を使う必要などを指摘する意見がありました。

最後に、BBC のその他の番組や報道全般についても、各委員から忌憚のない意見が寄せられました。
特に、新型コロナウイルスがまん延し社会不安が増すなか、いま起きている現実を知るため、さまざまな専門知識を得て正確な報道を心がけている BBC の姿勢を評価する意見がありました。また、週末などには、ストレートな報道以外の番組が増えていることを歓迎する意見もありました。

以上、委員からの多くの意見からは、堅実な報道とクリエイティブな取り組みから見えてくる BBC の姿勢、品質へのこだわりに対し、引き続き期待が寄せられていることが感じ取れました。

以上